《シンポジウム II》

最近開発された腫瘍マーカーの測定法と臨床的意義

司会のことば

越　智　幸　男（滋賀医科大学検査部）
遠　藤　啓　吾（京都大学医学部核医学科）

国民の4人に1人が癌で死亡する時代となり，『腫瘍マーカー』がインビトロ核医学検査の大きな比重を占めるようになった．腫瘍マーカーの癌診断としての有用性はAFPやCEAがその端緒となったが，1975年KohlerとMilsteinによるモノクローナル抗体の手技の確立により，CA 19-9やCA 125をはじめとする多くの新しい腫瘍マーカーが開発された．これらのエピトープは，主に細胞が癌化したときの糖鎖を認識する場合が多い．

腫瘍マーカーの測定は，従来は標識抗原を用いた競合反応によるRadioimmunoassay (RIA)が汎用されていたが，最近はImmunoradiometric assay (IRMA)が用いられてきている(RIAに比べて測定感度，特異性に優れている)．本法は精製抗原の必要性がなく，過剰の抗体を用いる欠点もモノクローナル抗体の使用によって解決され，今ではCEA, AFPを含めて，多くの腫瘍マーカーが本法で測定されるようになった．このIRMAとモノクローナル抗体の技術の開発が腫瘍マーカーの進歩に大きく貢献したと言えよう．

ただし，新しい腫瘍マーカーの進歩があまりに急速なため，その分野の専門家でさえ個々の腫瘍マーカーの特異性や臨床的有用性を把握するのが困難になってしまった．一方，診療保険制度の改正もあり，臨床の場ではより適切な腫瘍マーカーのコンビネーションアッセイ法をすべきである．

そこで，本シンポジウムでは，腫瘍マーカーの最近の進歩，とくに『すでに利用されている腫瘍マーカーの臨床的有用性』および『もうすぐ臨床に利用されようとしている腫瘍マーカー』に関して，それぞれの分野における最新の知見の発表をお願いした．演者はいずれもわが国を代表する腫瘍マーカーの専門家の方々であり，腫瘍マーカーの将来の展望を含めて討論し，有意義なシンポジウムとなるようにお願いしたい．

1. 消化器の腫瘍マーカーと糖鎖抗原

神奈木　玲　児（京都大学医学部臨床検査医学）

モノクローナル抗体の作製法が確立されて以来この十年あまりの間に，世界各地の研究室で癌抗原を認識するモノクローナル抗体が多数樹立され，癌の血清診断や，時には治療に活発に応用されている．現在では，癌と選択的に反応するこれらのモノクローナル抗体の認識抗原の多くが糖鎖抗原であることが同定されており，癌抗原として糖鎖抗原が重要であることが明らかになってきた．生化学的に糖鎖であることが判明している抗原については，糖鎖の構造からこれら抗原を系統的に分

Presented by Medical*Online